

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 5 月 22 日現在

機関番号：62501

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320162

研究課題名(和文) 日本古代における官衙機構の成立と展開

研究課題名(英文) A Study on the Establishment and the Development of Systems for Government Offices in Ancient Japan

研究代表者

林部 均 (HAYASHIBE, HITOSHI)

国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・教授

研究者番号：70250371

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,400,000円

研究成果の概要(和文)：日本古代における王宮・王都や地方官衙(大宰府・多賀城・国府・郡家)は、きわめて多様であり、それぞれの地域の歴史の中に位置づけてはじめて理解ができる。とくに実務の上から、それらを支えた官衙はきわめて多様である。これまで、考古学では、官衙の建物配置などをパターン化して、その性格を考えることが多かったが、官衙の建物配置や規模、その変遷は多様であり、単純にパターン化できるものではない。しかし、その多様なところにこそ、古代国家のもつ実態としての地域支配が反映されている。それを読み取ることが大切である。

研究成果の概要(英文)：The study revealed that there are various ways in which the systems of government offices were established and developed in the ancient times of Japan, and that such diversity reflects the true nature of the ancient nation.

研究分野：考古学

キーワード：王宮・王都 地方官衙 周辺官衙 実務官衙 官衙関連遺跡群 大宰府 国府 郡家

## 1. 研究開始当初の背景

王宮・王都、国府や郡家という地方官衙の遺跡において、考古学の発掘調査が精力的に進められている。

王宮・王都では、飛鳥宮、藤原宮、平城宮長岡宮、平安宮と変遷していく中で、その中枢(内裏・大極殿・朝堂などの天皇が使う中心施設)の建物配置の変化が明らかにされ、これらをもとに、その背後にある政治改革や儀式の変化などを読み取ろうとする研究が活発に進められている。

国府や郡家という地方官衙では、その中枢である政庁(国庁や郡庁など)の実態が明らかとなり、画一的な様相をもつ国府に比べて、郡家が様々な建物配置をもつことや、その変遷が激しいことが明らかにされている。

このように近年の発掘調査の進展、そして研究の蓄積から、王宮・王都、国府と郡家といった地方官衙では、その中枢の構造や機能はかなりの精度で明らかになっている。

しかしながら、王宮・王都や国府・郡家の研究では、儀式や政務をおこなう中枢だけが注目を集めているが、官衙機構という立場からみると、それだけで構成されるものではない。王宮・王都であれば内裏・大極殿・朝堂の機能、国府・郡家であれば政庁の機能を支えた実務的な官衙が、その周辺に配置されていた。むしろ、実際は、このような実務的な官衙があったからこそ、それぞれの中枢が機能したと考えるのが自然である。しかし、このような視点から官衙について、体系的な研究はなされていないというのが、現状である。

ここに本研究で王宮・王都、国府・郡家などの中枢ではなく、その周辺に配置された実務的な官衙にあらためて着目する理由がある。

## 2. 研究の目的

7世紀後半に成立した古代国家は、列島社会を支配するため、中央と地方に国家統治機構を整備した。中央には藤原宮や平城宮などの王宮・王都、地方には国府・郡家などの地方官衙において列島社会を支配した。いっぽう、王宮や地方官衙は、儀式や政務をおこなう中枢だけで機能していたわけではない。その周辺には、その機能を支えるための様々な実務的な官衙が配置されていた。また、手工業生産にかかわる遺跡の存在なども明らかとなっている。本研究では、これまでの王宮や地方官衙の中枢を中心とした研究だけではなく、とくに、その中枢の周辺に配置された実務的な官衙に焦点をあて、それが、いかに成立し機能したのか、また、具体的にどのような機能をもっていたのかを事例に即しつつ総合的に分析を加え、古代国家の官衙機構の実際的な機能の形成、展開過程を明らかにする。

すなわち、これまでの中枢からみた視点のみで検討されてきた古代国家の形成、展開過程を、王宮・王都、国府・郡家を支えた実務

的な官衙の整備、機能した状況の側面に視点を移して分析してみようとする試みである。

王宮・王都、国府・郡家の中枢には、シンボリックな側面があるため、その建物配置などが変化する年代と、実務的な官衙の側面から明らかにした機能が成立し、変化する年代は一致しない可能性が強い。おそらく、シンボリックな側面の整備が実務的な機能の整備に先行するものと推定される。シンボリックな側面からの整備が「たてまえとしての律令制の導入」ならば、実務的な官衙の整備は「本質としての律令制の導入」と理解することができる。これは、近年、提唱されている「日本型」律令制の成立と深くかかわる問題であろう。これが、本研究において実務的な官衙に視点をのこした王宮・王都、国府・郡家を対象とした研究をおこなう所以である。

## 3. 研究の方法

本研究では、王宮・王都、国府・郡家の中枢機能を支えた実務的な官衙の成立と、その変遷から、古代国家の実際的な機能の形成や展開過程、すなわち律令制の成熟度を明らかにすることを目的としている。

そこで、まず王宮・王都、国府・郡家の周辺で検出される実務的な官衙の発掘調査の成果を集成する。そして、個々の官衙遺跡において建物群の成立、変遷を明らかにする。また、あわせて、木簡や漆紙文書、墨書土器、畿内産土師器などにも検討を加え、遺跡、遺構とのかかわりのなかで、機能とその変化について分析する。さらに、別途、文献史料についても、官衙の実務的な機能にかかわる記事や条文についても再検討を加え、発掘調査の成果との対比もおこない、律令制がたてまえとしてではなく、本質的にどのように機能するようになったのかを明らかにして、その支配の実態を解明する。

この課題を明らかにするため、以下の分析をおこなう。

王宮・王都における実務的な官衙の分析。

国府・郡家における実務的な官衙の分析。

それぞれの遺跡における出土遺物(墨書土器、漆紙文書、畿内産土師器など)の分析。  
文献史料の集成と再検討。

## 4. 研究成果

飛鳥宮、藤原宮、前期難波宮、平城宮において、具体的に発掘調査でみつかった建物群の調査成果を整理して、実務的な官衙は、7世紀中ごろから後半においては、十分に整備されていなかったことを明らかにした。また、藤原宮において、その中枢に官衙が整備されるようになるが、とくに個性をもった建物配置をとるものは少なく、それぞれの職掌にあわせた独立した官衙とはなっていないことを明らかにした。また、平城宮においても、すでに官衙は成立しているが、その前半においては、いまだ、その機能に合わせた整備とはなっておらず、その機能の強化という

意味では、8世紀中ごろに大きな画期があることを検証した。

地方官衙では、大宰府跡、多賀城跡、秋田城跡などの政庁の周辺に配置される官衙の様相を整理した。その結果、どの地方官衙においても、政庁などの中枢が成立する段階には、実務的な官衙と呼びうる建物は、ほとんど存在しなかった事実を明らかにした。官衙として存在しているかぎりは、支配のための実務を担う場が必要であるが、それがどこにあったのかという課題が生まれた。その成立段階においては、政庁とよばれる中心施設がある程度の実務面も支えていた可能性がある。そして、実務的な官衙が周辺に成立してくるのは、大まかに奈良時代後半から平安時代であり、平安時代初めに実務的な官衙の整備ということでは画期が存在することを明らかにした。

宮崎県西都市日向国府跡、福岡県久留米市筑後国府跡、福岡県行橋市福原長者原遺跡、愛媛県松山市久米官衙遺跡群、福岡県粕屋郡粕屋町阿恵遺跡群、岐阜県関市弥勒寺官衙遺跡群、東京都府中市武蔵国府跡、埼玉県深谷市熊野遺跡・幡羅遺跡、群馬県前橋市上野国府跡、群馬県伊勢崎市三軒家遺跡、群馬県大田市天良七堂遺跡、群馬県高崎市多胡郡家跡、宮城県郡山遺跡といった国府・郡家遺跡について、遺構・遺物の検討をおこなった。

国府や郡家は、きわめて多様であり、それぞれの地域の長い歴史の中に位置づけることによってはじめて理解できることを確認した。とくに、これまで、考古学は、その方法論的な特徴から、建物配置などを分析してパターン化し、それぞれの性格を考えることが多かった。しかし、この方法は、ある段階までは有効であるが、それ以上の官衙の実的な機能などを考える場合は、官衙遺跡の建物配置や規模、その変遷はきわめて多様であり、その方法論的限界は明らかである。地域のひろがりや歴史の中に官衙遺跡を位置づける作業が必要である。そして、その多様性の中にこそ、古代国家のもつ実態としての地域支配が反映されていて、それを読み取る必要があることを強く認識した。

また、実際の官衙での実務の実態を検討するため、大宰府政庁跡周辺官衙不丁地区出土の漆附着土器を分析した。漆を扱う実務を担う官衙の実態を検討した。これまで、漆が大量に附着した須恵器壺・平瓶は、漆を生産地から消費地まで運ぶ運搬容器と考えられることが多かった。そして、実際に出土した漆附着土器の詳細な検討、自然科学的分析、『延喜式』などの文献史料の検討などから、実際は、大宰府の中での役所ごとでの小分けをしたときの容器であることを明らかにした。税として徴収された漆が、実際に、どのように使われたのかということをも具体的に明らかにした。おそらく、この大宰府での漆附着土器の使用の実態は、王宮・王都や他の官衙遺跡などにおいても、普遍化できる可能性

があることを指摘した。漆をひとつの分析の切り口として、モノの動きなどを検討することにより、官衙のもつ機能が具体的に明らかにできることを検証した。

福岡県行橋市福原長者原遺跡では、政庁の周囲をめぐる空閑地や大溝に着目して、藤原宮をモデルにしていることを証明した。また、同じ空閑地や大溝は、宮城県仙台市郡山遺跡においても認められることから、7世紀末から8世紀前半に列島の北の地域と南の地域において、地域支配のための大規模な官衙が出現していることを明らかにし、このことに、古代国家の地域支配、官衙機構の成立過程が如実に反映されていると考えた。また、福原長者原遺跡の期官衙の造営尺を詳細に検討して、その造営年代が、大宝令の施行後(701年)、和銅6年(713)までに限定できることを明らかにし、大宰府政庁期成立以前に大宰府を匹敵するか、あるいは凌駕する大規模な官衙遺跡が豊前地域に存在したことを明らかにした。これは、これまでの大宰府を中心とした歴史観(大宰府中心史観)ともいえる古代史に再考をうながす成果である。

飛鳥・奈良時代の畿内産土師器の分析では、九州を中心として、いつ頃から搬入がはじまり、いつピークをむかえるのか、分布が多い地域はどこかといった視点から具体的に資料を分析した。7世紀中ごろにおいては、吉岐・対馬への搬入がピークをむかえる。そして、奈良時代になると、ほとんど出土しなくなる。一方、大宰府や博多遺跡群においては、7世紀後半から急激にその出土量が増加する。7世紀における畿内産土師器の分布の変化には、古代国家が、どの地域を重視して地域支配をおこなおうとしているのかという意図が反映されている。また、同じことは、関東地方の上野地域・下野地域についてもいえる。この地域でも7世紀中ごろの畿内産土師器が大量に出土しており、この時期、東山道ルートが重視されていたことがわかる。それが、奈良時代になると下総地域へと分布が変化する。東海道ルート的重要性が高まったものと推定できる。また、大宰府への畿内産土師器の搬入過程を整理することにより、大宰府という官衙の成立にともない、出土量が増加していく様相が読み取れ、畿内産土師器の搬入が官衙の成立と整備に対応していることが明らかとなった。

ただ、7世紀後半以降、大宰府、博多遺跡群での畿内産土師器の出土は増加するとはいえず、九州の他の地域でも、その出土量は減るが、畿内産土師器の出土は続く。西海道諸国(九州)はたてまえとしては、大宰府を通しての地域支配であったはずであるが、この様相は、そういったことに再検討をせまる成果であり、やはり大宰府中心史観に再考を求めものである。いずれにしても、畿内産土師器の分布には、古代国家による地域支配の実態が反映されているとみてよい。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計26件)

1. 林部 均「政庁の構造と歴史的位罫(2)政庁周囲の空閑地と大溝」『福原長者原遺跡 - 福岡県行橋市南泉所在古代官衙遺跡の調査 - 』(行橋市文化財調査報告書 第58集) 行橋市教育委員会 2016年 P85-88。
2. 林部 均「政庁の構造と歴史的位罫(3)政庁の造営尺と年代」『福原長者原遺跡 - 福岡県行橋市南泉所在古代官衙遺跡の調査 - 』(行橋市文化財調査報告書 第58集) 行橋市教育委員会 2016年 P88-91。
3. 高田貴太「日本列島における百済関連の海上交通路と寄港地 - 瀬戸内海ルートと百済・栄山江流域 - 」『百済研究』16 百済学会 2016年 P53-70。
4. 林部 均「古代国家の形成と飛鳥宮、藤原宮・京」『日本考古学協会2015年度奈良大会研究発表資料集』日本考古学協会奈良大会実行委員会 2015年 P35-41。
5. 林部 均「藤原京・平城京と運河」『日本古代の運河と水上交通』八木書店 2015年 P248-252。
6. 仁藤敦史「広域行政区画としての大宰総領制」『国史学』214 2015年 P1-35。
7. 仁藤敦史「『日本書紀』編纂史料としての百済三書」『国立歴史民俗博物館研究報告』194 2015年 P245-275 査読有。
8. 仁藤敦史「離宮・頓宮・行宮」『古代の都市と条里』条里制・古代都市研究会 2015年 P29-41。
9. 仁藤敦史「『弘仁格』からみた辺要国規定」『日本古代の国家と王権・社会』塙書房 2014年 P179-200。
10. 仁藤敦史「高安城からみた広域行政区画」『原秀三郎先生傘寿記念文集 学縁』2014年 P190-194。
11. 林部 均「日本古代における王宮・王都の形成」『東アジアの古代都城と益山王宮城』韓国国立扶余文化財研究所 2014年 P56-85。
12. 林部 均「日本都城の形成過程と新羅都城」『歴博』186 国立歴史民俗博物館 2014年 P15-19。
13. 林部 均「新羅都城と日本都城」『文字が

つなぐ - 古代の日本列島と朝鮮半島 - 』国立歴史民俗博物館 2014年 P52-53。

14. 高田貴太「5・6世紀における百済、栄山江流域と倭の交渉 - 倭系古墳・前方後円墳の造営背景を中心として - 」『全南西南海岸地域の海上交流と古代文化』全南文化財研究院研究叢書1 韓国全南文化財研究院 2014年 P179-247。
  15. 林部 均「日本古代の王宮・王都研究の現状と課題」『東アジア都城比較の試み』山口大学 2013年 P124-148。
  16. 仁藤敦史「アジア史のなかのヤマト王権」『HUMAN』4 平凡社 2013年 P24-31。
  17. 仁藤敦史「倭国の成立と東アジア」『岩波講座日本歴史 1 原始・古代 1』岩波書店 2013年 P137-167。
  18. 仁藤敦史「『日本書紀』の任那観 - 官家・日本府・調 - 」『国立歴史民俗博物館研究報告』179 2013年 P425-454 査読有。
  19. 仁藤敦史「『記紀系譜』と古墳編年」『季刊考古学』124 雄山閣 2013年 P32-35。
  20. 仁藤敦史「七世紀後半における公民制の形成過程」『国立歴史民俗博物館研究報告』178 2013年 P261-280 査読有。
  21. 林部 均「日本古代における王宮構造の変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告』178 2013年 P177-202 査読有。
  22. 林部 均「平城遷都後の藤原宮・京」『都城制研究』6 奈良女子大学古代学研究センター 2012年 P31-50。
  23. 仁藤敦史「日本の都城」『アジアからみる日本都市史』山川出版社 2013年 P119-128。
  24. 仁藤敦史「古代の技術者編成」『時代を作った技 - 中世の生産革命 - 』国立歴史民俗博物館 2013年 P10。
  25. 高田貴太「考古学による日朝関係史研究の現状と課題 - 先史・古代を中心として - 」『考古学研究』59-2 2012年 P16-28 査読有。
  26. 高田貴太「栄山江流域における前方後円墳築造の歴史的背景」『古墳時代の研究7 内外の交流と時代の潮流』同成社 2012年 P121-141。
- [学会発表](計2件)
1. 林部 均「古代国家の形成と飛鳥宮、藤原宮・京」日本考古学協会 2015年度大会

2015.10.18 奈良大学。

2.林部 均「日本古代における王宮・王都の形成」『東アジアの古代都城と益山王宮里遺跡』(招待講演) 韓国国立扶余文化財研究所 2014.6.11 大韓民国益山市。

〔図書〕(計2件)

1.高田貫太『古墳時代の日朝関係 - 新羅・百濟・大伽耶と倭の交渉史 - 』吉川弘文館 2014年 363頁。

2.仁藤敦史『さかのぼり日本史 奈良・飛鳥「都」がつくる古代国家』NHK出版 2012年 123頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

林部 均 (HAYASHIBE Hitoshi)  
国立歴史民俗博物館・研究部・教授  
研究者番号：70250371

### (2) 研究分担者

仁藤敦史 (NITO Atushi)  
国立歴史民俗博物館・研究部・教授  
研究者番号：30218234

高田貫太 (TAKADA Kanta)  
国立歴史民俗博物館・研究部・准教授  
研究者番号：60379815

高橋一樹 (TAKAHASHI Kazuki)  
武蔵大学・人文学部・教授  
研究者番号：80300680

### (3) 連携研究者

今泉隆雄 (IMAIZUMI Takao)  
東北歴史博物館・館長  
研究者番号：60000501  
(平成25年12月に逝去)

佐藤 信 (SATO Makoto)  
東京大学大学院・人文社会系研究科・教授  
研究者番号：80132744

吉川真司 (YOSHIKAWA Shinji)  
京都大学大学院・文学研究科・教授  
研究者番号：00212308

渡辺晃弘 (WATANABE Akihiro)  
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部(平城地区)・室長  
研究者番号：30212329

坂井秀弥 (SAKAI Hidemi)  
奈良大学・文学部・教授  
研究者番号：50559317